

親子げんか顛末記

佐藤 敬治

突然、原稿依頼が来てしまい慌ててしまった。

「子どものいる暮らし」といわれても、と困っていたところ。我が家始まって以来という、親子げんかが勃発した。原因はささいなことで、子ども部屋の掃除をするしないという言い争いから始まった。上の子は小学四年生の女の子、下は一年

生の男の子。けんかはお父さんは自分の部屋はきれいにしているのかという、娘の主張に下の子が同調、それにお父さんの言い方はきつすぎるというお母さんが加わり、多勢に無勢の様相を示してきた。「まずい！」その時、胸をよぎったのはその一言。父親の権威が消えてしまう。とは言っても

の、理は向こうにある。娘が泣きだした。

形勢が不利なことばかり気にしてあせていたところ、娘が泣きながら言っていることをよくよく聞くと、掃除の話はどこへやら、なにやら、別のお話をしている。誕生パーティーに呼んだ子が、娘が主役のはずのパーティーでいつの間にかやら、イニシアティブを取り、つまらなかつたとか。いつも自分ばかり怒られて下の子は余り叱られていないとか。支離滅裂になりながらも、彼女なりにいろんなものを吐き出しているではないか。

普段、結構いい子をしてる子だけにこういう機会に一気に吹き出したみたいで、ケンカの事はどこへやら、いつまでも話し続ける。いつも余り子どものことなど考えていない私は面食らってしまった。どう対応していいか分からない。情けなくこちらでも泣き出したくなってしまった。彼女の悩んでいることにいろいろアドバイスをするのだ

が、なんの解決にもならない。たとえば、彼女はピアノを習っているのだが、練習時間を作ると友達と遊べなくなる。友達と遊べばピアノの練習ができない。それに対して、時間の割り振りをちゃんとすれば、両方できるよと言うと、友達と遊んでいて、ピアノの時間だから遊びをやめると言ったら嫌われるなどなど。どこまで行ってもケリがつかない。

時間が経つにつれ、私の方も落ち着いてきて状況を判断すると、どうも、悩みを解決することが目的ではなく、話をするのが彼女の目的だと言うことが分かり始めた。この頃、みんなで話す時間が無くなっていった。ましてや、下の子が小学一年生になり、心配するのはその子ばかりで、ちよつとほっときすぎたのかもしれない。さて、ケンカの話はここまでなのだが、私自身考え反省させられた。

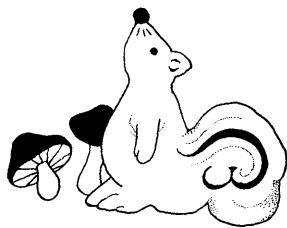
それは、子どもたちの成長に気づいていなかったこと、身体が大きくなっていることやピアノがうまくなったことは見たり聞いたりすれば分かる。しかし、心が成長することは、いつも一緒に暮らしているのによく分からなかった。小学校に行つてからは友達とのつきあいや学校での生活が一日の中で大きな比重を占めるようになる。その中で、家庭の中だけでは経験できないいろいろなことに遭遇し、問題を自分一人で悩み、解決し生活している。親の見えないところで勝手に成長しているんだらうな。嬉しいような淋しいような。もう、子どもだからという前置きはどっかに置いて話をしなくちゃいけないのかもしれない。

さて、話は変わって食べ物の話。

我が家の食卓にアジの開きや焼き魚がのると、子どもたちには不人気だ。骨があつて食べにくいというのが、一番の理由だ。魚をきれいに食べる

方法を教えようとするが、面倒くさがつて食べない。何とか食べてくれないかなと思ひ、いろいろ試してみたが、効果は上がっていない。他の食べ物ばかり嫌いが余りなく、よく食べてくれる。魚もお刺し身とかだとびっくりするくらい食べ、親と取りあいになる。

ある日、母親と下の子が学童保育所のキャンプに出かけ、娘と二人きり。暑くて食事を作る気にもならず、吉祥寺に出かけ食事することに決めた。吉祥寺にはこの頃、仕事でつきあいのあるイタリア料理のレストランがあり、そこに行こうと一旦は決めかけたのだが、和食が食べたいという気持ちはどうしても頭を離れず、娘に尋ねたところ



ろ、了解してくれた。嬉々としてその店に直行した。さて、注文は、一応娘の事も考えていろんなものを頼んだ。最後にお父さんのためだけにアマダイの塩焼きを頼み、待つこと十分。ちよつと

食べてみるかと皿を差し出すと、一口、「おいしい！」。その後、塩焼きは彼女の物になってしまった。そして、驚くことに家ではあんなに食べ方が下手だったのに、あれよあれよと骨から身はずし、平らげていくではないか。終いには、頭までほじくって食べている。終わってみれば皿の上は、きれいに食べられたアマダイの骨が残っているだけ。いったいどういうことなのかと、娘に聞いてみると一言「おいしいから」。我が家の名誉に賭けて一応言うが、うちの料理はそんなにま

ずくない。
結局、食べ方を教えるより、おいしい魚を一回食べさせれば、魚が好きになり上手な食べ方も自

然に覚えるということなのかもしれない。よく考えてみれば、食べ方というのも無駄なく食べるといふところから考え出された知恵なのだから、当然といえば当然。

どうも、しつけなどとまじめに考えると無理が出て、押し付けになりかねない。必要があつてはじめて授かるもの、そう考えると、自然と教えるほうもむりなく教える事ができるし、子どもの飲み込みも早い。

さて、この話には落ちがあつて、おいしい魚を食べているときに彼女が注文した飲み物はコーラ。一体、どういう味覚をしているのだろうか。これだけは、教えたくても教えられない。

(自由業)